

『恩』の構造 ——契約における非契約的要素の問題——

佐藤 嘉一*

菊池寛「恩を返す話」とグリム童話「蛙の王様」を例にあげて、物語の主人公（当事者）の視座および物語の構造の二つの側面から、日本と西洋における「心の習慣」の違いについて考える。当事者の視座、すなわち恩の存在判断のエポケーによる現象学的視座からの「恩再考」である。明らかになったことは以下の三点である。非契約的世界に生きる主人公の物語は、しばしば外発的・受動的なレリヴァンスによって動機づけられる行為者（「甚兵衛タイプ」）の物語であること。契約世界に生きる主人公の物語は内発的・能動的なレリヴァンスによって動機づけられる行為者（「蛙の王様タイプ」）であること。非契約的世界の物語は「恩を受けるもの」、契約世界の物語は「恩を与えるもの」のほうに意味構成されること。当事者のまなざしに着眼することによって「文化の世界」を生きる主人公の心の習慣形成の秘密が見えてくる。

キーワード：恩，契約，非契約，まなざしの交差，相互性

目次

はじめに

1. 問題の発見
 2. 「読み直すこと」
 3. 「恩」に関する先行研究
 4. 「まなざしの交差」の社会学
 5. 「恩」の構造 - 非契約世界における「相互性」
 6. 「蛙の王様」 - 「契約」世界の相互性の問題
- まとめと展望

はじめに

「恩」は「甘え」や「恥」などとともに日本人の暮らしのなかにいまでも心の習慣として息づいているのだろうか。それとも恩ということばはとおの昔に消滅してしまって、死語と化したのだろうか。恩はいうまでもなく戦前の文部省国定教科書『修身』において心すべき心得の一つとしてすべての少国民に注入された有徳の一つであった¹⁾。

イデオロギー的意味合いのよい恩についてここで取り上げる理由は何か。そのきっかけは恩の意味について外国の友人から尋ねら

* 立命館大学産業社会学部教授

本稿は産業社会学部共同研究会で報告した原稿に加筆修正したものである。

れたとき、これに わたくし はうまく答えられなかったからである。「同世代・同郷・同国」のもの同士では「分かりあっている」つもりでの事柄でも、異世代・異郷・異国のものの間のコミュニケーションとなるとなかなか「分かり合えない」ものである。「恩」は「Dankbarkeitの意味だ」とドイツの友人に説明しても、この「恩」の意味が相手に伝わったことになるか。ドイツに生まれ育った友人の用いる Dankbarkeit は日本に生まれ育ったものがここに思い描く「感謝」の意味と同じであるのか。

日常生活のなかで鍛えられていることばには、恩に限らず「慣れ親しみ」のオーラ、独特の「語感」がある。この さだかではない何か が蒸留してしまったことばは味も素っ気もない。不慣れなことばによる会話のときなど、この「さだかではない言外の意味合い」をどのように伝えるか、「はたと困った」という経験を諸君はもたないであろうか。

1. 問題の発見

（1）恩を返す話——大恩は謝せず

「赤ずきん」や「蛙の王様」の物語世界を日本のおとぎ話の世界、例えば「鶴の恩返し」や「浦島太郎」の話の世界と比べてみると「話のつくり」が同じようで、どこかが違っている。グリムのメルヘンの世界はグロテスクな話題が つぎつぎに出てくるわりには、どこことなくのびやかな、自由な雰囲気がある。「鶴の恩返し」を読んだ後のどこか哀れな感じが残る外発的な心の動きとは異質のものである。なぜだろう。グリムの「蛙の王様」の話と菊池寛の「恩を返す話」を例にあげて検討してみよう。

「恩を返す話」は、菊池寛（1888-1948）の短編小説である。話は島原のキリシタン宗門徒の「反乱」の鎮圧に加わった熊本藩の侍、神山甚兵衛が同藩のもう一人の侍、佐原惣八郎に戦場で助太刀され、その恩を返そうとして返せず、生涯苦しんだという恩を「返せなかった」話である。

あらすじ

キリシタン宗門徒に対する総攻めの布告がでて、その総攻めに神山甚兵衛も加わった。しかし不覚にも、切っかかる敵方の巨漢によってあわや命を失う羽目に陥る。戦いの最中、男の首のまわりに吊された十字架に夕日がきらめいて、燦然と輝いたと思う途端、甚兵衛は頭上に激しいショックを感じて、アツというまもなく昏倒した。/「甚兵衛どの、甚兵衛どの」と呼ばれる声に彼は我に返った。「惣八郎、助太刀いたした」。同藩の佐原惣八郎であった。巨漢の一撃で昏倒したところを惣八郎が駆け付けて、危急を救ってくれたのである。甚兵衛は命を助けられた惣八郎に対して「感謝のことば」を言わねばならなかった。しかしそれがどうしても口に出なかった・・・菊池寛「恩を返す話」（『篠重郎の恋他』新潮文庫、7頁-23頁）参照。

甚兵衛と惣八郎の間柄は兵法が同門であり、一度奉納試合の折りに甚兵衛が惣八郎に敗れている。以来甚兵衛は惣八郎にたいしてなんとなく屈折した気持ちを抱いていた。そしてこの度の出来事である。「有り難う」という一言がついに甚兵衛の口に出なかった。菊池寛は小説の進行の中でこのあと「甚兵衛の惣八郎に対する複雑な感情的屈折」を細かに描いている。

「自分の嫌な男を一生命の恩人としてもっていることはいかに不快であるかを考えた」こと、「この不快を取りのぞく第一の手段は、

早く恩を返すことだと考えついた」こと、
「惣八郎の危機を助けてやればよいと思った」
こと、「陣中に帰ってみると、同輩は何とも
言わなかった」こと、「惣八郎は今日の出来
事を誰にも披露しなかったのだと思った」こ
と、「甚兵衛の心の裡にはそれに対する感謝
の心は湧かなかった」こと、「彼は二重の恩
をきたような心がして、心苦しくさえ思った」
こと「甚兵衛は一心に報恩の機会を待った」
こと等々・・・（上掲書参照）

話の結末は、それから26年経ち、恩返し
最後のチャンスが甚兵衛に到来したが、結局
甚兵衛は惣八郎に「恩を返」せずじまいであ
った。菊池寛がこの物語で示したかったこと
は、解説者のことばによれば、「大恩は謝せず」
の思想であった。大正デモクラシーのもと
で封建道德の「恩」の実践を批評したのだと。

この話を外国のことばに置き換えて話した
とき、ヨーロッパに生きる人たちにはこれが
いかにも「物珍しい話」に聞こえたらしい。
ポーランドの長身のひげもじやの男は「恩
は大変神秘的な実存の思想だ」という感想を
述べた。「恩返しの話」は周知の、だれでも
知っている話の一つだと、昭和の日本で生
まれ育った わたくし がおもうのとは正反
対に。——この話のあと わたくし はこゝ
あるたびに「これは恩か」「これは恩では
ないか」と周囲のものから質問されて閉口
したのである。

（２）「蛙の王様」——約束を破るお姫さま

次に「蛙の王様」の話のあらすじを略述す
る。グリム童話の一番最初に出てくる話で
あるから、諸君もこの話をよく承知してい
ると思う。

あらすじ

昔むかし美しいお姫さまがおりまし
た。お姫さまの大好きな遊び道具は金色の

ボールでした。お城のそばに森がありまし
た。森には井戸がありました。お姫さまは
森に出かけてその井戸のところに坐って、
ボールを手にして高く投げてはまたボール
を捕まえる遊びが好きでした。ある日そ
の金色のボールが両手に落ちずに水の中
に落ちてしまう出来事が起きました。その
井戸は底が見えないほどとても深いもの
でした。お姫さまはしくしく泣き出しま
した。するとそこに一匹の蛙が現れて、お
姫さまに一つの提案をしました。「ぼくが
何とかしましょう。でもきみの金色のボ
ールを再び持ち帰ったら、きみはぼくに
なれるかい。ぼくはきみの仲間、遊び友
だちになりたいね。きみの黄金の小皿で
食べたり、きみの素敵なベッドで眠りた
いね・・・」と。「いいわよ」。蛙とお
姫さまの間に「約束」が取り交わされま
した。金色のボールが蛙からお姫さまに
手渡されました。ボールを受けるとお
姫さまは大喜び。さっきの約束はすっかり
忘れて、大急ぎでお城に帰ってしまいま
した。蛙はそれ以来毎晩「お姫さまは約
束破りの大うそつき」と城中にいいふら
しました。やがて王様にたしなめられて、
お姫さまはいいややながら蛙との「約束
」を果たしました。すると蛙は立派な王
子さまに変身しました。二人は早速にご
婚礼。めでたしめでたし。・・・（金田
鬼一訳『グリム童話（一）』岩波文庫、
17頁 - 27頁参照）

（３）問題の発見

さて、二つの話を読み比べ、さらに類
似の作品などを照し合わせてみると、二
つのことに気づく。一つは、物語の作
り方に二つのタイプが区別される。す
なわち、（Ａ）物語の主人公同士

の間に「約束ごと」が成立してのちをはじめ「物語」の世界が「開かれる」タイプ。(B)物語の主人公同士の「約束ごと」の成り立つ以前にすでに物語の世界が「開かれている」タイプ。Aタイプを「契約世界タイプの物語」、Bタイプを「非契約世界タイプの物語」とそれぞれ呼ぶことが出来る。興味深いのはBタイプの物語が日本の昔話、「鶴の恩返し」、「浦島太郎」などにおいてははっきりと象られること、Aタイプの物語は「蛙の王様」や「赤ずきん」など、グリム童話の世界において優勢を占めることである。

もう一つは、「物語」の世界における相互行為のシテ役とワキ役の役柄がそれぞれどのような役柄かに応じて、物語の語られ方に二つのタイプが区別されること。即ち(C)「価値」を与える者がシテ役となり、「価値」を受けとる者がワキ役となるタイプの物語(「与える者」の物語)、(D)「価値」を受けとる者がシテ役となり「価値」を与える者がワキ役になるタイプ(「受けとる者」の物語)。Cタイプの例としては「蛙の王様」の世界、Dタイプの例としては「鶴の恩返し」の世界。

以上にのべた二つの軸を交叉させると、論理的には四つのタイプの物語世界が予想されるが、実際には[A/C]タイプと[B/D]タイプについて多くの事例を見出す。

そこから第三に、より一般的なテーマ「社会はいかにして可能であるか」という問いが導き出される。「物語の作り方」の類別を足がかりにして、物語がうみ出され、語り伝えられる、より根本に潜む「制度」としての社会のつくられ方をそこから「透視」し、読みとれないだろうか。シテとワキとの間の「約束」問題から「契約」問題を介して「社会秩序」問題へ。物語の語られ方から隠れた「社会を読む」という

表1 「蛙の王様」と「恩を返す話」の位置関係

間柄	価値	
	C「与える者」物語	D「受けとる者」物語
A「契約世界」物語	『蛙の王様』	[A/D]
B「非契約世界」物語	[B/C]	『恩を返す話』

問題系の成立である。

2. 「読み直すこと」

(1) 「構造のパースペクティブの中で」

すこし遠回りになるが、ここには大江健三郎の『憂い顔の童子』の一節を引用してみる。物語を読むとは「どのようなことか」についての大江の注解である。

——私の先生のノースロップ・フライが、バルトを引用してですけど、こういうことを書いています。^{シリラス}真面目な読者とは^{リリーディング}「読み直すこと」をする読者のことだ、と・・・ かならずしもそれは、もう一度読む、ということではない。そうではなくて、本のもつ構造のパースペクティブのなかで読むこと。それが言葉の迷路をさまよっているような読み方を、方向性のある^{クエスト}探求に変える・・・/ 古義人は三年ほど前、コロンビア大学の劇場で、“Personal Matter”の翻訳者と組んで公開講演をしていた。そのなかで、「桃太郎」の話をした。・・・/ 講演としての主題は「物語の地形学」というもので、古義人は「桃太郎」という日本の昔話が、物語の人物と場所の関係を端的に示している、と例にあげたのだった。おじいさんは山(+)へ柴刈りに、おばあさんは川(-)へ洗濯に、という冒頭にすでにタテの軸が示されている。そこへヨコの軸をなす川上(+)から、大きい桃がドンブラコ、ドンブラコと流れて来る。/ 桃から取り出された子供は、むらの

狭い空間で幸せに暮らせばいいものを、ヨコの軸の下（-）に位置する鬼ヶ島へと出かけていく。/古義人は、桃を流してよこした川上の楽園と鬼ヶ島とが、ヨコの軸に侵入した宇宙論的な歪みでもって、メビウスの輪のように裏側でつながっている、という自分としての注解も加えた・・・（大江健三郎『憂い顔の童子』、167頁-168頁）

（２）「物語の地形学」

大変分かりやすい物語の「読み方」であると思う。しかも「構造のパースペクティブ」のなかで読むという大江の主張は、かなり以前に私たちが展開した「赤ずきん」の読み方とも気脈を通ずる点で大いに嬉しくなるのである。もっとも物語の地形学のパースペクティブのかわりに、私たちは「赤ずきん」を社会的基礎構造のパースペクティブから語ったのであるが。

バルトやノースロップ・フライのいう「物語の地形学」論は、物語のトポス、場所の遠近法を重視しているという点で、たしかに大江が指摘するように、物語の「普遍的な構造」の一角を射当てている。物語はnowhereではなにも起こらず、必ず「どこ」かで生起するのであるから。けれども物語には場以外にも「いつ」の問題、「いま」の発生の順序、now and then、根源のクロノスとその子どもたちとの関係、物語の「歴史的・時間」といった、異なるベクトルの「普遍的な構造」も現前するはずである。この点を柳田国男は『桃太郎の誕生』のなかで強調する。

（３）民話の時間的パースペクティブ

柳田が注目するのは民話が示す「大同小異」の問題である。「我々の昔話の中でも、特に外

国におけるこの道の学者を感動せしむべきものは、英国でいうシンドレラ、グリム童話の灰かつぎ姫、日本で糠福米福などとよんでいる物語であった」（『柳田国男全集10』15頁）。ヨーロッパにおける死人感謝譚や異類求婚譚のような種類を異にする民話も、わが国の『日本霊異記』や「猿婿入譚」などの昔話の中に認められる。

これらのデータをふまえて、柳田が試みたことは外国における類似の民話との比較のための物差しつまり物語の「大同小異」を見分けることの提示であった。

その物差しは三つ。一つ目は「貴き童子が信心ある者の希望に応じて与えられる」こと——貴き童子 桃太郎 は「水に沿って流れてきた桃」に出生の秘密をもつ——。二つ目は「貴き童子の事業」——貴き童子 桃太郎 の事業は「われわれの望んで遂げがたきすべてのもの」の達成；鬼退治と金銀財宝の領有。三つ目は「貴き童子が成長の後に最善の結婚をして類い少なき名家の始祖となる」こと——桃太郎 の場合、童話として必要がないので、「わざと脱落せしめた」と柳田（上掲書、192頁-93頁）。

以上の三つの物差しは、物語の「生成」にかかわる時間の三つの切れ目、誕生・成就・終焉の重要性を示している。年老いた男女に稚児が授かることの嬉しさと驚きは、古来万国万人の共通のものだ。子どもがすすくと成長して何事かを成就する願いも古来万人万国のものだ。そして出来れば後世に家名を残すこと。「貴き童子」の信仰が民俗社会における普遍的価値だという強い信念が、「桃太郎」の歴史的・時間的シークエンスの三つの切断という構想を貫通している。柳田民俗学の粹ともいべき傑作『桃太郎の誕生』の秘密はここ「時間の構造」論の展開に存するといわねばならない。

（４）民話の「まなざし^{クロッシング}の交差^{シリラス}」を読む

このことから私たちは真面目な読者として「物語」を読み直すという作業には、トポスを読む——物語の地形学に従事する——、クロノスを読む——物語の歴史学に従事する——など、「物語」を構造的パースペクティブのなかで読むことが重要であるということを改めて自覚するのである。

ここで本論に立ち戻ることになるのだが、「はじめに」のなかで論じた「恩」の話の場合はどうであろうか。恩は、いうまでもなく「間柄」の問題であり、時間や場所の問題ではない。例えば桜井庄太郎が例にあげている「恩」の用法は、すべて「間柄」、別言すれば「まなざしの交差」、interactionとintersubjectivityに関わる事柄ばかりである。

われわれは日常の会話や手紙などで、しばしば恩人、恩師、謝恩会、恩給、恩返し、恩知らず、恩に着る、恩に着せる、などの語をもちいる。・・・恩は人が他人にたいして何らかの恵みを与えることから始まるが、恩を受けたものはこれを感謝し、その恩に報いようとする。・・・（桜井庄太郎「おん〔恩〕」：『社会科学大事典2』鹿島出版会1968 356頁-359頁）

物語を読み込む普遍的な「構造的パースペクティブ」として「場所」や「時間」のカテゴリー以外にもう一つのカテゴリー、「まなざし^{ソシアル・リテイス}の交差」すなわち「だれかとだれかと」の出会いの構造が社会学的にはもっと注目されてよい。「恩の話」が外国の友人に分かりにくいのは、地形学的な構造のパースペクティブや歴史学的な構造のパースペクティブに収まりきれない固有の構造、出会いの構造についてのみこめていないからではないか。状況のなかで出会う当

事者たちには「間柄^{クロッシング}的な交差」の特有のパースペクティブの問題がある。この恩をめぐる「心的相互作用」の固有の問題について語る側も聞く側もしばしば「不感染^{イムニテット}」であるがゆえに、恩は「了解不能」の問いとなる。しかしわかりにくいということと了解不能とは異なる。

不感染^{イムニテット}という免疫学的表現は、社会学的に言い直せば「奇異」「珍奇」「異様」「場違い」「不思議」「疎外」「よそよそしい」「外来」「未知」「馴染みのない」「未経験」の感情、要するに「だれかとだれかと」の接触にともなって生じるある種の気分・感情状態である。「分かりにくい」とはこの「珍奇^{ストレンジ}」の感情が「わたくしのなかで少しもおさまらない」という心的状態を指すのである。

「まなざし」の構造的パースペクティブに留意することは「わかりにくさ」を解消し克服する途に通じる。これは同時に物語の小異を捨ててその「大同」につくという「柳田」民俗学がめざした比較民俗学研究の巨視的な展望とは異なり、より微視的な視野における物語の「小異」につく試みでもある。「大同」の途は切り開かれた。しかし「小異」の「わかる」社会学はいかにして可能であるか？

３．「恩」に関する先行研究

（１）恩の意識の実態研究

「恩」の研究は奥行きが深い。この問題に従事するものにはかなりの先行研究のたしなみが要求されるはずだが、生憎そのような持ち合わせがわたくしにはない。日本社会の「恥の文化」をめぐる問題系の一つとして一時期「恩」や「義理」が人々の議論的となったという程度の知識である。その数少ない知識の一つが、川

島武宣の「恩の研究」である。

川島武宣が「恩」意識の実態調査を行ったのは、1951（昭和26）年、戦後間もない東京都下の一農村においてであった。調査結果から川島は予想外の結果をえた。「恩」の意識が「すでに消滅している」という結論である。川島の実態調査が注目を浴びた一つの理由は、これによってベネディクトの「恥の文化パターン」遍在性の仮説に一定の歯止めがかかったという点にあった。

恩の意識に関する実態調査——川島武宣
「『恩』の意識の実態」（『中央公論』66巻3号1951年、昭和26年）から引用。

- (a) 調査対象および調査内容：東京都下の農村の老（60歳以上）・中（30歳以上59歳）・若（30歳未満）を対象に実施された親、天皇、先生、その他（地主小作・本家分家・仲人・媒酌人）に関する態度調査である。
- (b) 調査結果：結果は「著者自身にとってはなほだ意外な点が多かった。」 「恩」の意識はこの時点ですでに「変容・消滅」している。 国定イデオロギーとしての「恩」は制度次元ではとうに解体している。
- (c) 調査から得られた「親の恩」に関する意見
- ・「目立って恩というほどのことはない、育ててもらったというだけです」
 - ・「からだをつくってもらった恩はあるが、うちは貧乏になったからね・・・家が順調にいってれば親の恩はあるのだが」
 - ・「親には早く死に別れたから、あまり感じない」
 - ・「あんまり近すぎて恩義という風には感じない。愛情ではないか」
 - ・「恩ではなくて、親しみだ」・「うちじゃ親が金を使ってしまって、こんなに貧乏

になってしまったんだもの、恩なんて感じない」

- ・「親の恩については学校で習ったから、知っている」

(d) 調査に基づく恩に関する見解（調査の結論）

1. 恩とは特別の恩恵である。恩は恩を与える人の特別の好意にもとづくものであり、この情緒的要素のゆえに受恩者の感謝の念に支えられた情緒的・人身的な関係となる。恩は、受恩者にとってきわめて重大な利益を与えるものとして、受恩者が受けとることである。
2. 与えられる恩恵は受恩者にとって、そのようなものとして受けとられうるような現実性をもっていなければならない。恩の本体は、このように主観的なものである。
3. 「恩」の現実的基礎ないし現実的要素は以上のとおりであるから、経済的・政治的・社会的条件の変化は、これまで維持されてきた関係を解体することがあり得るのは当然である。
4. 恩によって、恩を与えたひとと恩をうけた人との間に、上下主従の緊密な「人情」関係を生じる。
5. 本家を中心とする衛星家族とのピラミッド型階層構造の媒体として、恩は社会的機能をはたしている。

(2)「家制度」の社会学的実証研究

もう一つの実証研究について一言したい。有賀喜左衛門による「家制度」の社会学的実証研究である。この研究には直接「恩」についての言及はない。しかし研究の特色は「同族団」とよばれる本家・分家・別家の「家—連合」にみられる「相互給付」の関係を長期にわたって調

べあげ、家制度の存続と変化を生活万般のミクロレベルの「出し入れ」（生活必需品や盆暮れの付け届け、冠婚葬祭、家の普請などもの・ひと・ことのあらゆる社会関係）から明らかにした点にある。換言すれば、ミクロの社会関係を丹念にフォローすることによって社会意識の存続と変化を明らかにしようとした研究である。「恩」の研究に引きつけていえば、「恩」意識の存続と変容を家—連合というミクロレベルの生活連関の「相互給付」の「^{インプット・アウトプット}出し入れ」の全体から明らかにしようとしたのである。

川島の場合は、恩を「情緒的、人身的な関係」としてとらえ、恩の本体を「受恩者の主観的なもの」に求めている。この主観的なものはマクロ次元の「制度」（経済的・政治的・社会的条件）に「支え」られている。それ故「制度」が変われ（「農地改革」）ば、本体の主観的なもの、受恩者の「恩」意識もまた変化する。川島は農民の恩意識の消滅（「ミクロの現実」）を「制度的構造」の改革から引き出そうとしたのである。

有賀の場合は、川島のように明確には定式化出来ないが、ミクロの生活連関の中に見ようとしたという点で、川島の研究のベクトルとは方向を反対にしている。

4. 「まなざしの交差」の社会学

（1）構造変動・社会関係・まなざしの交差

ところでマクロの構造変動と社会意識（川島）の因果連関やミクロの社会関係と社会意識（有賀）の因果連関に関する研究は、どちらかといえば観察者の目で把捉される限りの「恩」の研究である。川島は「恩の本体」が「受恩者の主観的なもの」であるという認識を示すが、その「本体」の解明は、もっぱら調査票の「質問項

目」や「自由回答」形式によって得られる範囲に制限される。

状況のなかの自-他関係：「私とあなた」の^{セルフ=アザー}パーソナル人身的関係における当事者同士のまなざしの^{クロッシング}交差が主題化されねばならない。この「状況のなかの当事者のまなざし」は「制度や地位—役割」関係の客観的構造（マクロ分析）には直接解消しがたいし、また、生活連関の相互給付の長期的出し入れの記帳報告（ミクロの観察記録）の総和とも異なる。

当事者が状況の内部から事態を「解釈」し「理解」する主観的・間主観的意味構成の問題域は一つの固有の構造的パースペクティブであると言いたいのである。その特徴は^{エンカウンター}出会いにともなう自分と相手の間に折り合いをつける瞬間に研究者も降り立つ視座の確保にある。

（2）「相互性」の三位相

「蛙の王様」の話や「恩を返す話」を「当事者のまなざしから「理解」する際に、その主題の中心に浮上するのは当事者の間のことばや行為のやり取りの「相互性 Gegenseitigkeit」の問題²⁾である。互いに交わすことばや行為による働きかけの問題である。一方の当事者（蛙や甚兵衛）と他方の当事者（お姫さまや惣八郎）の状況を相互

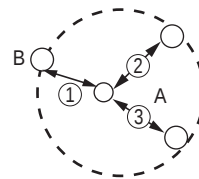


図1 状況におけるAとBの「相互性」の三位相

出来事の二重の偶然性：相互作用の位相
出来事の相互依存性：共存共栄の位相
出来事の互恵性：価値の等価交換の位相

性 の網の目の中に位置づけることである。

(3) ホマンズとタキエ・スギヤマ・レブラ

AとBの間に相互性が成り立つためにはいかなる条件が満たされねばならないだろうか。「相互性」の社会学理論としてG・H・Homans (1961), *Social Behaviour — Its Elementary Forms*がある。効用と価値をめぐるパーソン(自己)と他者(相手)の交換としてホーマンズは「相互性」を定義する。社会的行為の交換理論の構想である。

ホーマンズの交換理論はタキエ・スギヤマ・レブラやP・ブラウなどによる以下の説明とも一致する

Bに対するAの親切は、これのお返しをBに対して義務づける——「二重の偶然性」問題

AがなにかをBに与えるのは、BはAが必要とするものをもっているからである——「共通の善行の相互依存性」問題(共存共栄)

AがBに与えるものはBがAからうけとるものとぴったり同じである——「交換価値の同値性」問題(等価交換)[Takeie Sugiyama Lebra, *Japanese Pattern of Behavior* 1976, p.101.]

「相互性」の構成にかんする問題はそれ自体固有の問題であって、これを特定の状況の外的地平に解消し、縮減することは出来ない。ある状況の外的地平とは、出来事が生起する「森の中の井戸の傍」とか「戦の最中」といった周囲世界の空間的配置とか「お姫さま・蛙・細川藩の侍」といった登場人物の「地位」的特性などを意味する。「蛙とお姫さま」の話も「甚兵衛と惣八郎の話」もこれらの状況の外的地平を地にして成り立つが、「状況をどのよう

に定義するか」という問題(主題の核)——「約束」や「助太刀」などの図柄——なしにはいずれの物語も進行しない。物語は状況における行為者の「まなざしの交差」,「相互性」の様態によって定められる。状況の時空間的構造の差等や役割的性格の差異などによってではない。

よきサマリヤ人の譬えは「まなざしの交差」問題の中核を射当てている。

「ある人エルサレムよりエリコに下るとき強盗にあひしが、強盗どもその衣を剥ぎ、傷を負はせ、半死半生にして棄て去りぬ。ある祭司たまたまこの途より下り、之を見てかなたを過ぎ往けり・・・然るにあるサマリヤ人、旅して其の許にきたり。之をみて憐れみ、近寄りて油と葡萄酒とを注ぎ、傷を包みておのが畜にのせ、・・・「いずれか強盗にあひし者の隣となりしぞ」(『新約聖書』ルカ伝 10.33-36から)

「恩」の問題は従来「制度」の問題(川島論文:「封建的イデオロギー」の残滓の問題)として、あるいは文化人類学的「文化パターン」の問題(恥の文化)として取り上げられてきた。しかし以上から明らかになったことは「状況のなかの当事者」のまなざしの交換から「読み直す」という恩にかんするオルタナティヴがあるということである。

5. 「恩」の構造——非契約世界における「相互性」

(1) 「恩の受け手」の視点の「特権化」(「ゲシュタルト化」)

他者Aから受けた恩を受け手Bはどのように「体験」し「行動」するだろうか。結論を最初に示せば、第3図のような構造体が考えられる。「恩の与え手」に対する「恩の受け手」の恩返

しの意識には以下の3つの位相、もしくは3つのパターンの感情複合（感謝・道徳的負い目・社会的拘束のコンプレクス）が区別される。

(i)感謝の気持ち：「感謝 Dankbarkeit」「アリガトウ」[例えば「鶴の恩返し」「浦島太郎」など]

感謝の表現の基本形：その組み合わせ、つまり混合形もありうる。

a) 発話次元—ことばによる感謝：「アリガトウゴザイマス」「ドウモアリガトウ」「オオキニ」など。

b) 行動次元—おこないによる感謝：お礼の挨拶まわり（答礼訪問）

c) 物象次元—ものによる感謝：お礼返し（物品・金品の贈与）

(ii)「負い目 in debt」の気持ちを抱く「スマナイ」[土居健郎『「甘え」の構造』から]

『「甘え」の構造』の著者は、恩恵を受けたものがしばしば「アリガトウ」というかわりに「すみません」ということばを用いることに注目している。「すみません」、「スマナイ」という発話には「他者の恩恵や善意に自分が頼っている」という意味が含まれている。恩を受けたものは、かれのために払った恩人の犠牲に気づいているし、恩を受けたものは、その「借り」を十分に返すことができないと感じている。「スマナイ」という恩を受けたものの「言説」の底には、「感謝の気持ち」と「お詫びの気持ち」とが複合して横たわっている。反応・反作用は、一般に行為や作用とくらべて率直ではなく「両面感情」を付帯しやすい。屈折しやすいのである。

——余談になるが、金沢にいた時分に、ある店で買い物をして支払いを済ましての帰りに、店の老婆が「オキノドクニ」と丁寧

に「お辞儀をしている。オキノドクニとはなんだと、これには面食らった。多分、たいしたものをおあなたにお渡ししたのではなかったのに、こんなに沢山のお代を頂戴してわたしは「負い目」を感じますという、スマナイ、あなたにはとてもお気の毒だ、という主観的な道義上の負い目を示すことばであったのではないか。なんとも懐かしいことばである。

(iii)わずらわしい恩（恵）——社会的^{コンストレイン}強制としての「義理」

恩（恵）の受け手がいつもこのような「プラスの内的道徳意識（価値意識）」を抱くとは限らない。むしろこれを「わずらわしい」と思う、外発的な束縛として受けとめられる場合もある。

「義理ほどつらいものはない」ということわざがあるように、時として恩恵の受け手にとってそれがマイナスの重荷、煩わしい厄介ごとになることもある。この個人の気持ちに「煩わしい」と感じられる恩恵は「義理」（外から課せられた義務）と呼ばれる。義理は一種の「感謝」の疎外態である。感謝の気持ちへと「内面化」せずに、いわばうわべだけの「儀礼的な」形式で恩人にもっぱら「お返し」をする行為・言説・贈与である。

恩の儀礼的表現形式は、内面化された感謝の気持ち（「恩」の実質的基礎）が次第に冷え込んで石のように凝固した恩を意味しよう。恩の受け手は「日常のルーティン化した拘束」の下におかれる。

要約。受け手の側の「恩」体験は三つのレベル「感謝—負い目—義理」[本源的恩—内面化された道徳—疎外された恩]へと層化・範疇化される。ちょうど卵が「殻と白身と黄身」が一

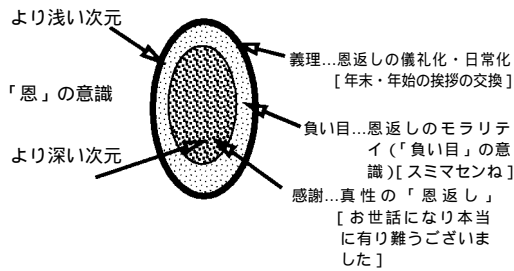


図2 「恩返し」意識の三位相：たまごの殻・しろみ・きみの構造体として

体であるように。菊池寛の短篇小説「恩を返す話」は、もつれた甚兵衛の「恩」体験（感情連関の三つの諸相）を甚兵衛の立場から 'Als ob Verstehn' 「デアルかのような理解」として活写した点にあった。

（2）「恩を与える者」の視点の^{グラウンド}非特権化（「地」化）

これに反して、菊池寛の小説では「恩を与える者」即ち惣八郎の「言動」についての叙述は万事控え目であり、その叙述は恬淡としていて要領を得ない。惣八郎のポジティブな言動として注目されるのは、すでに紹介した「甚兵衛どの、甚兵衛どの」・・・「惣八郎、助太刀いたした」の一節。そして物語の「結び」の一節に紹介される惣八郎の「覚書」である。

惣八郎は「甚兵衛に恩を与えたこと」にたいして「超然」としている風なのである。

「その後、享保の頃になって、天草陣惣八郎覚書という写本が、細川家のひとびとに読まれた。その裡の一節に、『今日はからずも、甚兵衛の危急を助け申し候、されど戦場の敵は私の敵にあらざれば、恩を施せしなど夢にも思ふべきに非ず、右後日のために記し置候事』」（「恩を返す話」新潮文庫；23頁）

小説の「結び」の一節である。物語の進展で

は「惣八郎は恩を施した」と一度も明記されなかったのに、最後の最後の結びで「後日のために記しておく」と断り書きがなされている。惣八郎はなぜに「覚書」にこれを認めたのだろう。しかもこの部分は菊池寛の「創作による」ものと「注解」されている。

「恩着せがましい」という日常語がある。日本の昔話にみる 恩 の話は「鶴の恩返し」から「浦島太郎」まで、恩を施すものは「要求がましい」存在としては描かれない。これは恩を与えたものが軽々しく「恩を口にする」ことを憚る、嫌うという「社会的通念」に負う。その通念の発生はどこにあるのか。

あることを「口にしない」「明言しない」ということと、あることに「関心がない」「無関心である」ということとは同じではない。「関心がないから口にしない」こともあるが、「おおいに関心があっても」「口にしてはならない」から「口にしない」こともある。ではなぜ恩を明言することが憚られるのか。

興味深いことに、日本における おとぎ話 は「親切な心優しいおっとりしたお爺さん」と「窮地に陥っている動物たち」との「相互性」として筋立てられている。鶴 にしろ 亀 にしろ、「恩を受けるの」は人間ではなく、動物の姿をとっている。この動物のシンボルは「むら共同体」の外部者、よそ者、遠所者、「異人」、村人にとっての「他者」を示唆する。ついでに言えば、「蛙の王様」では要求がましい方が「動物」の姿をとり、蛙がおおいに「人間のお姫さま」にたいして「恩をうる」という話になっている。人間と動物の「相互性」があべこべなのである。

（3）恩と noblesse oblige

千年が一日であるような伝統的共同体に、ある日突然「よそ者」即ち「異人」の出現があったと想像してみよう。村人たちの共同主観にはこの人物が「訝しい」「怪しげな」存在として映しても不思議ではない。仲間うちではないカテゴリー、ツルやカメ。ツルは実際に吹雪で道に迷った旅の「織物の職人」、カメは「嵐で遭難し海岸にたどり着いた遠方の漁師」であったということは大いにあり得る。村衆の偏狭なわれわれ意識にこれらの「異人」は疎んぜられ、無視され、途方に暮れる。「親切なおじいさん」は衆人環視にもかかわらず、村の慣習（フォークロア）をふりきって「他者の目を自分のものにできる」自由な例外人あるいは村衆から一目おかれる長老であった。

お爺さんやお婆さんの親切を心に深く感じ「一心不乱に織物を織る」ツルや「お礼に竜宮城に招く」カメの寓話は、こうしてみると、まだ市場経済の「相互性」の原理を構築しえなかった「前資本主義社会」の狭小な交通関係の限界内で「例外的に成立した」インターローカルな人と人との間の「相互性」のあり方をメッセージする、実際に起こった出来事、あるいはもっぱら夢のなかで想像されたリアリティのコンストラクションであった。展望のない閉ざされた共同体からの脱出の夢として。意外にも、古代ローマのあのことば noblesse oblige——自分の高いものは勇気・仁慈・高潔・寛大などの徳を備えねばならない——に、この脈絡からみつめる限り、心優しい長老の恩の施与は意味的に親近性を帯びてくる。

6. 「蛙の王様」——「契約」世界の相互性の問題

（1）契約の原理

グリムの採集した「蛙の王様」の話は、もう一つの前資本主義的社会における「インターローカル」な人と人との関係 原理 の発生を教えている。「蛙の王様」の話では人と人との社会的 契約という通念——この場合「社会的」の語は厳密に言えば「二人の間の打算と計算による取り決め」という意味で ゲゼルシャフト的という語がより適切である——がしっかり根づいていることである。「お姫さまのボールを井戸から持ちかえる」という蛙の社会的 行為は、その動機が単なる好意によるものではない。蛙の行為はいわゆる ゲマインシャフト のカテゴリーには属さない社会的行為なのである。

お姫さまも蛙の王様もそれぞれ権利と義務の観念を身につけている 行為 の主体である。両者は自分のことばを守らなければならないし、将来の結果を予期して合理的に自分の行いを選択できる 責任 主体でなければならない。だからこそ二人の間に 約束 が取り交わされてのちはじめてこの物語ははじまる。お姫さまの約束破りの物語が。

昏倒した状態の甚兵衛には惣八郎と取引する自由は皆無である。甚兵衛は、惣八郎による単独の、一方的で一面的な決断によって死をまねがれた。二人は恩関係の成立後になってはじめて話が始まる。運命（帰属価値）の間柄の話が。蛙の王様の約束による業績価値をめぐる話とは方向が別である。

グリム童話には、「約束」を取り交わす契約型の物語が多い。（「赤ずきん」、「マリアの子ども」、「狼と七匹の子やぎ」、「悪魔のすすだらけの兄弟分」など）。蛙の王様の話では「価値を与える者」

(蛙の王様)の視点が特権化され、物語のシテ役となり、「価値を受け取った者」(お姫さま)の視点は非特権化される。これも「恩を返す話」と対照的である。

権利や契約や「人権」といった 難しい 概念がやさしく「物語」をとおして 口伝え されたという事実は注目すべきことである。マックス・ヴェーバーはいう。「契約」の通念は「合理的資本主義の経済」の成立後に人々の間に普及したというより、むしろ古くからひろく民間に存在し、逆に「近代の合理的資本主義」を生み育てた、と。グリムが採集した民間伝承はなによりもそのことの有力な証拠である。

(2)「かゝごめ、かごめ」

「かゝごめ、かごめ・・・月夜の晩にツルとカメがすべった」と歌っている声が耳もとに聞こえる。幻聴である。「恩返しの話」の主人公が「わらべうた」に出てくる ツル や カメ であるからか。寒い雪空のもと畏にかかった鶴、村の腕白小僧にいじめられている亀。話のそれぞれのワキ役、媼と翁や浦島太郎には果報この上もない出来事にちがいないが、他方のシテ役の鶴や亀にはどこかに悲しみや暗さが残る。「^{グフェンクニス}囚われの身」あるいは「捕囚」の低い音が「籠の中の鳥」や「鶴の恩返し」を通底している。

なにも相手と約束も契約もしないのに、巻きこまれる出来事。ほとんどの事故・災難——天災であろうと人災であろうと——は、この種の出来事である。いや人間がこの世に生まれるということ自体、従って生存という事実そのものが、当事者の目線からみれば、この種の始元的事実を開示している。社会の出来事は大げさにいえば「非契約によって生ずる出来事」と「契約に

よって生ずる出来事」とに二分される。「恩を返す話」と「グリム童話」は、出来事の系の綾が織りなす絵模様の両極端である。

最後に、絵模様の両極端の一つ、グリム童話における「象徴動物」について。なぜグリム童話では「恩恵を与えるもの」が象徴動物(「蛙」)の姿をとるのか。「鶴の恩返し」に対して象徴動物の位置関係が正反対である。これは村びとと異人との出会い、インターローカルな 交通関係 の差等に根ざすのか。幻視される 異人とむら人との間の社会的勢力の差等によるのか。一方における閉鎖的ムラ共同体(周囲を海に囲まれた)の「共同幻想」(鶴 や 亀)と他方における開かれたムラ共同態(陸路を介した^{グゼルシャフト}インターローカルな 社会 圏の萌芽的成立)の「共同幻想」(蛙)の差異の現れとして。共同幻想の意味世界の差異性は共同体の基礎的世界経験の限界性と因果連関しないまでも、表裏一体的な構造として解釈する方向を取らねばならない。個人の幻視・幻覚がその個人の生活経験とレリヴァンスをもつように。

まとめと展望

「恩」の分析からわかったいくつかの事柄を箇条書きにしてみよう。

1. 非契約的世界つまり「恩の世界」に生きる主人公(「受け取る者」)は外発的・受動的なレリヴァンスによって動機づけられる行為者 = 「甚兵衛」タイプであること。
2. 契約的生活世界に生きる「主人公」(「与える者」)はどちらかといえば「内発的・能動的レリヴァンスによって動機づけられる行為者 = 「蛙」タイプであること。
3. 「非契約的生活世界」の物語は「恩を与え

る」行為者の視点よりも「恩を受ける」行為者のほうに関心が向けられていること、などである。

「当事者のまなざし」に焦点をあてることによって「恩の（非契約）世界」を生きるひとびとの「習慣」^{ハビット}形成の秘密が露見する。

最後にこの「恩の構造」論文に寄せられたある編者のコメントを付記しておく。編者（ニュールンベルグ＝エルランゲン大学のスルバル教授）は、恩の問題を、デュルケームの社会秩序問題の観点から「契約」における「非契約」的要素の存在の問題として捉える解釈を示している。契約関係と非契約関係をいずれも実体化でせずに、「まなざしの交差の構造」を理解するための二つの契機として理念的にこれを用いるという解釈である。対象に真理が付着するという考え方ではなく、まなざしとまなざしの間に「意味」が現れるという見方である。

日本と西洋の文化を 両極端 として考える文化「実在論」的見方——ベネデクト『菊と刀』が支配的であった頃、「恩」は「ある」とか「ない」という形で問題にされた。現象学的社会学の研究は、恩の「存在判断」に関してエポケー（判断停止）の態度を保持する。それは「価値自由」（ヴェーバー）の学である。観察者による「ある」と「ない」とが問題ではない。行為者のパースペクティブから、コメントにある「間と内から」恩を「理解」することが問題なのである。以下のコメントが嬉しいのは本稿のねらいをよく理解し、いや、はるかに越えた準位において問題の核心を射当ててくれているからである。

Die Beiträge von Waldenfels, Vaitkus und Sato decken in diesen Sinne die Sinnstrukturen sozialer und gesellschaftlicher Ordnungen auf

und dringen in die Prozesse des inter- und intrakulturellen Verstehens ein.../ Sato demonstriert in seiner Analyse des japanischen ONG den Unterschied zwischen der japanischen und des westlichen Auffassung der Dankbarkeit und zeigt so ihre vor jeden durch gesellschaftlichen Vertrag geregelten Austausch gegebene, ursprüngliche und moralisch verpflichtende Reziprozität : aus Ilja Srubar & Steven Vaitkus (Hrsg), *Phänomenologie und soziale Wirklichkeit* 2003, S.8 . . . [佐藤の論文は . . . 社会的秩序ならびにゲゼルシャフトの秩序の意味構造を露わにし、また文化の間と内からの理解の諸過程に肉迫している.../佐藤は日本の恩の分析のなかで恩恵の日本と西洋の考え方の違いを明らかにし、しかもゲゼルシャフトの契約によって規制されるあらゆる交換に先だつて与えられる恩恵のもつ根源的で道義的に拘束的な相互性を明らかにしている（傍点は筆者）スルバル/ ヴェートクス編『現象学と社会的現実』2003、八頁]

注

- 1) 「『恩』の構造」は、大分以前ドイツでの在外研修（1989-90 ビーレフェルト大学）の折に「日本の文化」についてなにか話してほしいという Richard Grathoff 教授の求めにより、その研究仲間たち—Steven Vaitkus や Susanne Kassab など—のまゝで発表したものである。恩には「二恩」すなわち父母の恩または親恩・師恩、「四恩」すなわち父母・国王・衆生・三宝^{すじょうさんぼう}の区別がみられる。いずれも「自己」を中心において観照する同心円的な広がり^{イデオロギー}の観念体系（仏教・儒教）であり、親子の絆（縁）という生物学的自然の「帰属性」^{アスクリプション}に道徳的身体技法^{ハビット}の端緒を求めている。
- 2) 本書第一章においてわれわれは「まなざしの交差」の重要性についてふれた。ジンメルもこの点について以下のように記している「ほかの人を受

け入れるまなざしのうちに、ひとはおのれ自身をあらわにする。主体が客体を認識しようとする仕方によって主体はここで客体に身をゆだねる。ひとはまなざしを与えることなしに、同時にまなざしを受けとることはできない。眼は他の人にあらわにしようとする心を他の人にあわわにする。明らかにただ眼と眼を直接交わしてこのことがおこるとき、この瞬間全ゆる領域における人間的諸関係のもっとも完全な相互性がつくりだされる。」

(G.Simmel, Soziologie, S. 484-5)

- 3) この象徴動物の用法のちがいを熟考することは経験的社会学者のつとめである。インターロカルな社会関係(「局地間交通」)がどの程度の規模——非常に稀であるか、季節ごとか、不定期的か——と性質——ことばや習慣を全く異にする人びとの間の交易——において切り開かれているか。ヨーロッパの場合のほうが、トボスの構造の視点からみて、島国の日本と比べると、異なる民俗・習慣・言語の所持者との交流が盛んであった。局地圏をめぐる血なまぐさい紛争も無数に存在した反面、社会関係の形式がそれだけゲゼルシャフト化され、ビジネス・ライクとなるチャンスも大きかった。民話における象徴動物の表現形式の小異がこのような実質的社会関係の差異に源泉すると想像してみることも重要なことである。ついでに、表1の空欄を埋めてみよう。管見では、グリム童話は「与える物語」に、日本の昔話は「受けとる物語」にシフトするケースが多いのである。

表2 グリム童話と日本昔話

問柄	価値	
	C「与える者」物語	D「受けとる者」物語
A「契約世界」物語	AC 蛙の王様	さるかに合戦
B「非契約世界」物語	いはら姫(なむり姫)	BD 恩を返す話・鶴の恩返し

参考文献

- 有賀喜左衛門「村の生活組織」『有賀喜左衛門著作集』第七巻、未来社、2000年
 大江健三郎『憂い顔の童子』講談社、2002年
 大塚久雄・川島武宣・土井健郎『「甘え」と社会科学』

- 弘文堂、1976年
 川島武宣『『恩』の意識の実態』(『中央公論』66巻3号、1951年)
 金田鬼一訳「蛙の王様」(J・グリム/W・グリム著『グリム童話』、岩波文庫、1979年)
 菊池寛「恩を返す話」(『藤十郎の恋・恩讐の彼方に』所収、新潮文庫、1970年)
 Richard Grathoff, Intersubjektivität und Normalität; Phänomenologische Beschreibung und soziologische Interpretation moralischen Verhaltens (Bielefeld, 1990)
 桜井庄太郎「おん〔恩〕」(『社会科学大事典2』鹿島出版会、1963年)
 Yoshikazu Sato, Die Struktur des “Ong” (Dankbarkeit) (『立命館大学産業社会論集』第26巻第3号、1990年)
 Yoshikazu Sato, Eine phänomenologische Untersuchung des Ong (Dankbarkeit) (Ilja Srubar / Steven Vaitkus (hrsg.) Phänomenologie und soziale Wirklichkeit; Entwicklungen und Arbeitsweisen für Richard Grathoff (Lesk+Budrich, Opladen 2003)
 佐藤嘉一「『日常』と異化の問題—現象学的社会学序説—」『立命館大学産業社会論集』第31巻第1号、1995年)
 土居健郎著『「甘え」の構造』弘文堂1971年
 Georg Simmel, Soziologie Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung. 2. Auflage (Verl. Duncker & Humblot München und Leipzig 1922)
 George Caspar Homans, Social Behaviour Its Elementary Forms (Routledge & Kegan Paul, London 1961)
 Takie Sugiyama Lebra, Japanese Patterns of Behavior (Honolulu: Univ. Hawaii Press, 1976)
 Takie Sugiyama Lebra & W.P. Legra eds., Japanese Culture and Behavior; Selected Readings (Honolulu: Univ. Hawaii Press, 1974)
 柳田国男「桃太郎の起源」(『柳田国男全集』10、ちくま文庫所収、1990年)

Structure of “ON”

— A problem of non-contractual factors in contract —

SATO Yoshikazu *

Abstract: In this paper the author would like to make an interpretation of structure of ON (gratitude) in special reference to the problem of <habits of the heart>. ON as a kind of “habits of the heart” should be comparatively examined under the structural context of human interaction in terms of “mutuality” “reciprocity” and “interdependence” of two or more actors. The author would like to make a comparison of Kikuchi-Kan’s short story, “ON WO KAESU HANASHI” (a story of repaying obligation) with Grimm’s fairy tale, “a frog king”. These two novels are subjected to examine under the light of phenomenological analysis, according to which 1) any story should be read from its hero’s point of view and 2) any story should be read from its narrative structure (that means making sense of story from a structural frame of reference; ’ ‘under what situation’ did ‘who’ do ‘what’ ‘to whom’ and so forth.).

In summary: through his critical scrutiny of the above mentioned stories, the author could make clear at least the following three points:

- 1) It is under the non-contractual situation where a hero can not but assume an asymmetrical interdependence that one will often be apt to find such a person like a JINBEI type, that is, the type of actor whose action is motivated by a certain imposed and passive relevance to his partner. A lot of narratives of this type will be found in Japanese fairy tales.
- 2) On the contrary, it is under the contractual situation where a hero conforms to a symmetrical interdependence that one will be apt to find such a figure like a frog king, that is, the type of actor whose action is motivated by a certain intrinsic and active relevance to his partner. In most cases of Grimm’s fairy tales one can find this type of story.
- 3) The narrative about <non-contractual world> will be mostly relevant to a meaning-constitutions depicted by ON-gratitude-receiver, while the narratives about <contractual world>, by ON-gratitude-donor.

The author suggests here that we can come in sight into the secret of forming <habits of the heart> by turning our attention to a phenomenological-structural analysis of human interactions.

Keywords: structure of ON (gratitude), habits of the heart, mutuality, interdependence, reciprocity, human interaction, Kikuchi-Kan, Grimm’s fairy tale, narrative structure, contract vs. non-contract, symmetrical vs. asymmetrical

* Professor of the Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University